第１部　ねぷたとは？

特別対談『弘前ねぷた VS 青森ねぷた』

津軽錦絵作家協会　会長　三浦　呑龍 氏

ねぷた絵師　竹波比呂央 氏

聞き手　2010 弘前ねぷたコンテスト審査委員長　山本　和之 氏

＜山本＞

皆さん、こんにちは。このコーナーの聞き手を務める山本と申します。

昨年の弘前のねぷたの審査委員長を務めさせていただきました。

このコーナーはですね、「弘前ねぷた VS（バーサス）青森ねぷた」というふうにたぶんなっているんですが、松木先生のお話を延長で考えると、どちらも「ねぷた」というのがやはり正しいような気もするんですが、それよりも何よりも、VS、バーサスっていう対決を意図してしまうところに、実は弘前と青森の大変な対抗意識が表れているわけです。ただ、我々これからお二人のゲストをお迎えして対談をしていくわけですが、これは決してバーサスということではなくて、それぞれの特徴、違いをより鮮明にしてお互いのねぷたのこれからの更なる発展のために意見交換をしていこうということでありますので、そういう内容で進めていきたいと思っています。よろしくお願いします。

さて、それでは今日のお二人をさっそく紹介したいと思います。紹介しながらそれぞれの作品をこのスクリーンに一つずつ映し出したいと思っておりますので、よろしくお願いします。

まず、今日青森からお越しいただきました竹浪比呂央さんであります。ようこそいらっしゃいました。

＜竹浪＞

こんにちは。竹浪比呂央です。よろしくお願いいたします。

＜山本＞

１９５９年、木造町、今のつがる市のご出身、生まれでありまして、その後東北薬科大学に進まれて薬剤師としてずっと活躍されています。３０歳で初の大型ねぶたを制作して、２０００年、２００４年、２００５年とねぶた大賞を受賞されました。そして２０１０年１月、つまり去年１月には青森市内に竹浪比呂央ねぶた研究所を設立しました。あの三角形の建物の…

＜竹浪＞

アスパム。

＜山本＞

そうですね。ちょうど手前側といいますか、南側に白い建物がありまして、そこが研究所。そこでねぶたの創造と研究をしながらもグループ展に出展するなど、ねぶたを紙と灯の造形とみなして新たな可能

性を追求し続けていらっしゃいます。現在、「あおもり灯と紙のページェント」これは八甲田丸のところですよね。青森駅前で来月１３日まで開催中。

それから県立美術館では来月２０日まで「青い森に連れてって　色・形・音のインスタレーション」という企画も今、出展中ということでございまして、今日お越しいただきました。ちなみにこの作品は平成１８年の知事賞。別にこれでいきなりこれで喧嘩を売るというわけではないんですが、これはじょんがら節ですね。黒石市の要するに浅瀬石城の。ちょっとそこのところだけ説明してもらってもいいですか。

＜竹浪＞

じょんがら節の発祥、これに関連して常椽和尚という人がいらっしゃったんですが、その人が最後の奮戦をするという場面を描いたということですね。

＜山本＞

ということは、右側にいるのはひょっとして為信さん…？

＜竹浪＞

ではなくて…

＜山本＞

津軽藩の武将ということですか。

＜竹浪＞

ええ、そうです。

＜山本＞

ああ、そうですか。常椽和尚が身を投げて、最後追い詰められて身を投げて。そこが川原、じょんからの名前でということで、そういう伝説があるんですが、こういうねぶたを作っておられます。平成１８年度の知事賞を受賞したねぶたです。後程ゆっくりとお話をお伺いいたします。

＜竹浪＞

よろしくお願いします。

＜山本＞

そして、もう皆さんお馴染みでございますが、弘前を代表して三浦呑龍さんです。よろしくお願いします。

＜三浦＞

三浦です。本日はよろしくお願いいたします。

＜山本＞

私の方からご紹介申し上げます。

昭和２７年生まれ。私と同じ年の生まれですが、辰年ですね。学年が僕の方が早生まれで上なんですが、それはそれとして、弘前市生まれ。昭和５０年、ねぷた師の先駆者である故石沢龍峡先生、日本画家としても初代錦絵作家協会会長としても活躍されました。その龍峡先生に師事されまして本格的にねぷた絵の制作に取り組みました。昭和４６年から大型ねぷたの絵を手掛けて、これまでに４００台以上を制作していらっしゃいます。

現在は津軽錦絵作家協会第６代会長、それから昭和５４年から国立民族学博物館、これは大阪にある博物館ですが、呑龍さん制作の大型ねぷたを展示中。

そして昭和５８年、ＮＨＫ紅白歌合戦に出演したねぷたを作りました。さらに、大河ドラマ「いのち」というのが、この津軽を舞台にＮＨＫで放送されましたが、それに関してもねぷた関連の美術を担当されました。加えて平成７年、平成８年、東急日本橋アートギャラリーにて「津軽錦絵三浦呑龍展」が開かれました。

そして平成９年、大阪御堂筋パレードに１００団体の弘前ねぷたが参加したパレードがあったんですが、その中で人気第一位という名誉ある地位に輝きました。それから今年の２月、来月から、東京渋谷の東急デパートでやはり「津軽錦絵三浦呑龍展」個展が開かれることになっております。お忙しかったですね。４００台も作るというのはすごいと思いますが。ちなみにこの絵は、去年の市役所の福利厚生会のねぷたでございまして、もう、パッと見た瞬間に三浦さんの絵だということが分かるんですが、その秘密なども今日は解き明かしていければいいなと思っております。

よろしくお願いいたします。

＜三浦＞
よろしくお願いいたします。
＜山本＞
お二人がどんな話をされるかというのは大変興味深いのですが、実はですね、松木先生の方からねぷたの歴史、あるいは呼称も含めて詳しくご紹介がありましたけれども、実は弘前…あ、津軽弁でやったほうがいいって、ごめんなさい、すみません。
津軽衆だということで津軽弁で話させていただきます。どうしてもマイク持てば共通語になって迷惑してしまって、カニしてください。弘前の人は意外に青森のねぷたの歴史を知らないんじゃないかという気がいたしまして、今日は竹浪さんにちょっとそのことをご紹介いただこうというふうに思っています。
実際、町内会のねぷたもあるんですよね、青森って。
＜竹浪＞
もちろん、あります。
＜山本＞
我々は主に大型ねぶたを見るんですが、地元の人はもっと違う楽しみ方をしているということなんで、その辺りからちょっと現状を教えてもらえますか。
＜竹浪＞
はい。今ちょうどスライドにあるのが、今純三さんの…。
＜山本＞
昭和３年。
＜竹浪＞
そうですね、戦前のねぶたの様子でありますけれども、昔は今みたいに大型ねぶたとか子供ねぶたとかいう区別なしに、青森も町内会だとかが主体で。それから大工さんとか左官屋さんとか、そういう組合とかですね、そういう職場の慰安といいますか福利厚生といいますか、そういうことで大小様々なねぷただったということなんですね。特徴的なのは戦前のねぷたは一人担ぎの担ぎねぷたなんですね。それを３人の人が竿で支えてということで１００台以上も出たという記録がありますね。それが県庁の前にずらっと並んでということなんでしょうけれども。戦後結局、青森は大空襲に遭いまして。
＜山本＞
これ昭和３年なんですけど、刺又とかササラとか、弘前ねぷたでも伝統と言われる道具類ですね、ちゃんとやっぱり青森もそれは継承しておられたということですね。
＜竹浪＞
ええ、もちろんそれは。ですからそんなに大きな違いはこの当時はなかったかもしれませんね。
＜山本＞
一人担ぐっていうのをさっき松木先生のお話から類推すると担ぐ灯篭の話をされていたので、その流れ

を汲んでいるということも言えますね。

＜竹浪＞

ええ、流れを汲んでいるんでしょうね。ただ、決定的に青森と弘前の大きな違いというとハネトの存在という。

＜山本＞

すでに昭和３年の時点で子供たちが。なるほどね。

＜竹浪＞

それは青森の町の起こりというか、町の発展してきた様子、それに関連してくるんですけどね。

＜山本＞

次の写真。これが昭和７年の青森のねぶたです。基本的に大正時代から昭和ずっと遡っていくまでこのような形態だったと考えられているんですが、大きさも含めて皆さんで見ていただければいいんですが。これが要するに一本の竿で担ぐということなんですよね。で、四方から支えて運行しているということに青森はなっておりました。

＜竹浪＞

正面に「官許」って書いていますよね。今でもねぶたになぜか「許可」ってつけますが、松木先生のお話にもありましたけれどもねぷた禁止令なんてありましたから、ちゃんとお上の許可を得てますよという「官許」という、これは青森も弘前も共通でしょうけれど。

＜山本＞

次の写真を見せて。さっきは昭和７年です。これは昭和２２年です。ここの間にずいぶん大きさも変わってくるし、人も変わってくるし、年数も変わってくるんですが、大きな違いが一つあるんですよ。さっき竹浪さんがおっしゃった空襲を受けた後、戦争を挟んだということなんですね。

＜竹浪＞

空襲を受けまして、焼け野原で、全く衣食住足りない状態。だけども、青森の人というか津軽の人は「ねぷたねばまいね」ということで、もう既にその翌々年、昭和２２年にねぷた出してるんですよね。このころはもう担ぎではなくて台車に乗せた今のねぶたのような形ですね。これ日通のねぶたですね。

＜山本＞

曽我五郎兄弟の場面ですけれども、よく知られた場面です。ちなみに昭和２０年に青森の空襲が、７月２８日にありまして、焼け野原になりまして、２１年に戦後復興計画がスタートする。

つまり敗戦から１年経つや経たずのうちにねぷたが実は、その時にもうスタートしてるんですよね。これはすごいですよね。

＜竹浪＞

はい、そうなんです。食べるものもない、住む家もなくてバラックを建てなけりゃならない、その木がねぷた作りに使われているっていう、これがすごいですよね。

＜山本＞
すごいですよね。昭和２２年、この年ですが、ちょうど戦災復興港祭りという名前でねぷたがこういうふうに登場してきて、それがだんだん大型化していきながら昭和３３年に港祭りが青森ねぶた祭りに名前が変わるという。竹浪さんに伺ってエッと思ったのが大阪の万博に出てるんですよね。あれからまた一段と変わってくるわけでしょう。
＜竹浪＞
１９７０年の、いわゆる大阪の万博、昭和４５年ですけど。その時に岡本太郎の太陽の塔の下のお祭り広場に青森のねぶたが、いわゆる展示とかではなくてまるごと囃子もハネトも全部行って、そこで祭りを再現したと。その影響で観光客が右肩上がりでずっとこう伸びてきたということなんですね。
＜山本＞
ですから、青森のねぶたには戦後復興という大きな再出発の意味と、つまり復興のシンボルであるということと、万博という日本が戦後から立ち上がるときの万博への出展によって大型化、観光化という色彩をそこでものすごく強く帯びるという、この二つの歴史の側面を今もずっと引きずっているというふうに考えていいですね。
ということで、だいたい青森のねぶたを少し皆さんにご紹介したんですが。さて、次いきましょうか。青森と弘前というとどうしても、比べるのはねぷたではなくて観光客の数なんですよね。何百万人って、そっちがいつもより５０万人多いだとか、せこいところでこう争ってるんですが、実は、作り手としてはそれぞれどういうふうに見てるのかということをお聞きしたい。ではまず、三浦呑龍さんに、青森のねぶたというのはここがいいよねとか、ここがうらやましいよねとかという点って感じておられますか？
＜三浦＞
うらやましいということとちょっと違うかもしれませんけども、私はねぷた絵を描いているというとほとんど自分の家で籠って描く。絵を描くまでなんですよね。
団体の方に引き渡すとそこで自分の役目はほとんど終わり。造形的なものは、ねぷたの骨組みとか照明とか、それはまた別な部分で、全部が関与できるというわけではないんです、私らの立場は。引き渡してあくまでも終わり。
それと、描いている自分というのは一人なんで、ちょっと孤独ですよね。
その点、私も実際、青森のねぶた作っている場所は拝見したことはないんですけれども、写真とか雑誌等とかに竹浪さんとか載っているのを見させていただいていますけれども、ある程度スタッフ的なというか、そういう雰囲気の中でやられているのはいいかと。
それから仕上がりがだんだん見えてくる。中に照明を入れながら紙を貼っても描割の段階では中に照明を入れて具合を見ることができるでしょ。こっちは一発勝負なんで、ちょっとその辺心配だというか、そういう気持ちをずっと引きずっていくのがちょっと違うかなと思っております。

＜山本＞
孤独じゃないのがいいなと。だんだん見えてくるのがいいなと。ちょうど、竹浪さんから制作過程の写真をお借りしているので、これがさっき言ったアスパムの向かいにある研究所のプレートなんですね。これ、ねぶた大賞を取ったそうですね。
＜竹浪＞
はい、そうです。
＜山本＞
２０００年のねぶた大賞のこれが下絵、まず下絵を描きます。どういうふうに作っていくかというのをこれからちょっと皆さんにご覧頂きます。次どうぞ。こうやってやるんだそうです。針金で、腕？
＜竹浪＞
そうです。鬼の右腕ですね。最初に顔の位置を決めて腕の位置を決めてという。いわゆる、造形作家が、芯を作って手足のデッサンを考えながらバランスをとってつけていくという。
＜山本＞
ちょっと次々に見せてください。手ですね。
＜竹浪＞
これは、左手ですね。
＜山本＞
ここになるともう、何がどうなってるんだか、分からねくなるんた…。
＜竹浪＞
この背中が私だというのはお分かりいただけるとは思うんですけれども。ちょうど鬼の顔の真ん前にいるんですが、もうわかんないですよね。
＜山本＞
はい。わからないですね。次お願いします。
＜竹浪＞
これは紙貼りです。基本的に上から下へ貼っていきまして、紙を貼ってくださるスタッフはほとんど女性の方が多いんですけれども。こういうふうに背中の上、ちょうどこれは鬼のこの辺、ボノゴのところに上がって貼っているという。
＜山本＞
つまり、紙貼りさんとおっしゃる、いつもこの時期になると来てくれる、アルバイトでやってくれる主婦の方々。常連さん。
＜竹浪＞
そうです、そうです。
＜山本＞

では、次お願いします。

＜竹浪＞

これは貼り終わった段階ですね。左の手の方から、奥にあるのが鬼の顔になりますけれども。

＜山本＞

では、次どうぞ。

＜竹浪＞

これは貼り終わった鬼の顔ですね、はい。

＜山本＞

はい、次どうぞ。

＜竹浪＞

これは墨が入って蠟が入ったと。この辺は弘前の皆さんも当然お分かりでしょうけれども。

＜山本＞

まず蠟描きをしてその次･･･

＜竹浪＞

いや、まず墨を書いて、その後、蠟ですね。

＜山本＞

では、次お願いします。

＜竹浪＞

これは、灯が入った鬼の顔ということで。

＜山本＞

はぁ～。では次どうぞ。

＜竹浪＞

これも、墨ですね、最初は。

＜山本＞

はい。次どうぞ。

＜竹浪＞

これが、色を仕上げたところになりますけれども。

＜山本＞

はぁ。色付けというのは、筆もしくは刷毛。

＜竹浪＞

はい。それから今で言うエアブラシ。

＜山本＞

エアブラシ。

＜竹浪＞

ええ。コンプレッサー使っての。

＜山本＞

顔は何かご自分で丁寧に刷毛とか筆とか･･･。

＜竹浪＞

顔も、ほとんど私はエアブラシですね。

＜山本＞

はぁ。そうですか。では次お願いします。

＜竹浪＞

これが、台上げと言いまして、弘前のねぷたで言えば絵貼りって言うんですか、これは団体さんが、せいのって持ち上げて台の上に乗っけるわけですよね。

＜山本＞

これ、波の部分ですよね。

＜竹浪＞

これは送りの波の部分ですね。

＜山本＞

要するに、部分部分で作って、それが１つの台に乗って、くっつけて１台ができる。で、どうぞ。

＜竹浪＞

で、これが完成という。

＜山本＞

はぁ。「ねぶた大賞」というふうに書いてあります。ありがとうございました。あの、孤独じゃないというのは本当にそうだなというのはよく分かると思いますが、要するに…

＜竹浪＞

でも、基本孤独ですけれどもね。

＜山本＞

あ、そうなの？

＜竹浪＞

え。これ最終意志決定は私ですのでスタッフは･･･この鬼の手を伸ばすのか曲げるのか、これも全部私ですから･･･

＜山本＞

それは誰も手伝ってくれないんだ。

＜竹浪＞

そうそう。そういう意味では孤独は孤独ですけれども、作業自体は呑龍さんのように一人籠ってという

ことではなくてですね。

＜山本＞

なるほど。さて、一方で、竹浪さんは弘前ねぷたってやっぱりいいよなっていうのはどういうところでしょうか。

＜竹浪＞

私はとにかく子どもの頃からずっと絵が好きで絵を描いていまして、私は実は西郡の木造町、現在つがる市ですけれども、ここはやっぱり弘前の扇ねぷたもあり、青森式の人形ねぷたもあるという。

＜山本＞

混じってる。

＜竹浪＞

はい。うちの町内の隣の町内は、毎年弘前の方に扇を描いていてもらってたんですよ。ですから節堂さんの絵も龍峡さんの絵も達温さんの絵も、今は地元の人が描いていますけれども。ですから本物の弘前のねぷたを小さい頃から見て育ったんですよ。

＜山本＞

はぁ。そうですか。

＜竹浪＞

ですから、青森のねぶた作ってますけれども、弘前のねぷたも実は大好きで、特に大きいでしょ画面が。あの真っ白なキャンバスに一気に、下絵は作るんでしょうけれども、描いていくというか墨をぶつけていくという。やってみたいなと思うんです。

＜山本＞

ちょっと見てみましょう。呑龍さんの、これは冒頭にお見せしました。次です、はい。これは茂森新町で去年の知事賞だったと記憶しているんですけれども、昼間に撮った映像です。当然見送りがあります。見送りをどうぞ。これは『津軽藩伝説雪女』というタイトルがついていて、灯が入ります。しばらく見ていたくなりますね。描いてみたい。

＜竹浪＞

そうですね。

＜山本＞

はい。これはですね、坂田金時ですね。坂田金時の土蜘退治。

＜三浦＞

土蜘退治の場面ですね。

＜山本＞

上が土蜘で、坂田金時って金太郎さん？

＜三浦＞

金太郎ですね。

＜山本＞

この構図っていうのは、上からこう蜘が襲いかかってくるというのは、すごい迫力があるんですけれども、どこをポイントに？

＜三浦＞

主役が１番目立つ部分なんで、金時は真ん中に持ってきたいという意図があって。あるいは中心として動きが出るようにっていう、渦巻くような動きがないと迫力に通じませんので、その辺のところは多少意識して考えております。何回も何回も試行錯誤して。

＜山本＞

そうですよねえ。次に鏡、見送りを、次ちょっと見せて。夜の見送りですね。

＜三浦＞

結局、浮世絵とか先輩の描いたものとか、前に描いたものとかいろいろアレンジしたり、参考にしたりとか、いろんなパターンがございます。

＜山本＞

わかりました。竹浪さん、青森には見送りというか、そでというか、そでを描く･･･

＜竹浪＞

そでも昔、描いて付けていたねぶたもあったみたいです。私も３年位前、平将門というねぶたを作ったときに、後ろに額を作って、そこに滝夜叉姫という送り絵を、粗末なものなんですけれども、ちょっと描きたくなりまして、弘前風の送り絵っこを一つ描いて貼ったことがあるんですけれども。

＜山本＞

どうでした？

＜竹浪＞

まぁ、自分ではいいなと思ったんですけれども。

＜三浦＞

ぜひその写真でもあったら、機会があったら見たいですね。

＜竹浪＞

よろしくお願いします。

＜山本＞

これから絵はどんどんご覧いただくので、次に進みましょうか。やはり、もちろん弘前は絵が良くて、描いてみたい、ぜひそれは描いていただきたいと思うんですが、青森、弘前それぞれに伝統ってありますよね。伝統って一口で言ってもなかなかピンとこなかったりするんですけれども、大変重いものだろうというふうに我々は傍観者ではありますが見てしまうんですが、作る側にとって伝統ってどれくらいプレッシャーになっているのかって、ちょっと聞いてみたいと思うんですが、呑龍さんどうですか？

＜三浦＞

プレッシャーは結構感じるんですけれども、というか弘前自体がもう伝統文化的なねぷたなんですよね。というのは、描いている自分よりも、観ている市民、観客の方が、ねぷたには詳しい方もいっぱいいるだろうし、その辺はどれくらいの、絵に対してですよ、ねぷた祭の中の絵に対して関心持っているかっていうと、私自分ごとなんですけれども、３月まで市の博物館にいて、７月恒例の弘前ねぷた展ありますけれども、２年続けて１番最初に入ってきたのが３、４歳くらいの同じ子でしたね。

おばあさんの手を引っ張って、始まると同時に。市民会館の辺りからもう博物館の入り口が見えるんですけれども、おばあさんの手を離して走ってくる。その子が２年連続で１番乗りで入っていきました。そういうお子さんとか、デイサービスの８０、９０くらいのお爺さんとか、お婆さん、２０人位の車椅子で来られて、最後の特別展示室という天井高いところに自分で企画したんですけれども、半立体ねぷた、灯を入れた、レリーフみたいなの。ねぷたの囃子も流しておりましたので、そこに皆さん来られたら、１人のお婆さんが曲に合わせて「ヤーヤードー」って言ったんですよ。

そしたら他のおばあさんも「ヤーヤードー」って言って、全員で合唱して「ヤーヤードー」始まったんですよ。出て行かれるときにも介護の職員の方に話しかけて、「今日は良かった。冥土の土産にできた」って。まだまだ頑張っていただかなきゃいけないんですけれども。

そういうふうに小さい頃から一生肌に染み付いているところが弘前のねぷたの良いところかなと思いますし、結局自分の描いた絵も１０人中１０人でなくとも、見ている人がいるので、そういう人の気持ちに応える、そういうことを考えるとやっぱり中途半端なことはできないし。

さっき松木先生がねぷたの歴史のことを言われておられましたけれども、大きな変化というのは、明治に入ってから弘前では扇ねぷたができた、定着した。それが何かっていうと、ここは城下町だし、市民の気持ちに合ったんでしょうね。三国志とか水滸伝とか。

だから、半端な見方をしているんじゃなくて、そういうのに憧れるっていうか、血飛んだり生首飛んだりするのも、古来、変な人は粋だっていう捉え方もしますので、そういう要素もすごく大事なところなんですよね。それをいろいろ、ねぷた何台か描く中にできるだけ入れて、同じものは被らないようにとか、そういうようなこと。プレッシャーというか、そういうことを大事に考えております。

＜山本＞

では次の絵を。これは市の博物館に保存されている絵ですが、竹森節堂さんです。こういう絵でした。皆さんも見たことあるとは思うんですけれども。ねぷたの扇の形も含めて、ねぷた絵の構図も含めて、竹森さんがこう定着させた。次お願いします。色使いが一目で違いますよね。石澤龍峡さん。三浦呑龍さんの御師匠さん。もうなんと言っていいかわからない、この黄色、橙色、オレンジっていうのでしょうか。色使いが、最初の節堂さんは、赤と緑が基本。龍峡さんになると、黄色・水色・橙というのが、それを表に出してくるというのはそれまでなかった。

＜三浦＞

ええ。色の塗り方も重ね塗りという技法もあって、例えばオレンジの上に赤をぼかすみたいな、また深みが出る。龍峡先生の場合は重ね塗りという技法をよく使っていたと思います。

＜山本＞

続いて、ねぷた和尚といわれた達温さん。もう三人三様でこれまたすごい迫力で。達温さんの強さというのもすごいですねぇ。

＜三浦＞

本当にこう、灯が入ったときに目がらんらんと光るというか、その蝋の効果というのはかなり計算しておりますし、線が太いですよね。これ離れてもはっきり絵が見えるようにという、そういう効果を狙って描かれてたと思います。

＜山本＞

今、３人の名人の絵を見てきたんですけれども、それぞれに顔料っていうんでしょうか、絵の具というんでしょうか、それも変わってきたりしているんでしょうか。

＜三浦＞

基本的には同じ染料を使っているでしょうが、塗り方とか色の使い方、好みもあるでしょうし、その辺の違いだと思いますけれども。

＜山本＞

これは要するに、三浦さんは小さい頃から見ていた。

＜三浦＞

そうですね。

＜山本＞

このねぷたが目の前を通っていった。すごいどきどきしたと。

＜三浦＞

そうです。私、物心ついたというのは、昭和２７年生まれですので、大体３０年の辺りっていうのは、すごい子どもながらに強い印象が残っているんですけれども、この３人というか、先生方は、今でも雲の上のように思うんですけれども。

＜山本＞

子ども時代のドキドキ感とはどういうものだったんでしょうか。

＜三浦＞

明らかに心臓がときめくような、息が荒くなるような感動というんですか。そういうのを記憶しておりますよ。

＜山本＞

竹浪さん、そういう気持ちわかりますか？

＜竹浪＞

ええ、それはもちろんわかりますね。あっちからねぷたが来るっていうだけでもドキドキっていうかザワザワっていう。

＜山本＞

じゃわめく？

＜竹浪＞

はいはい。

＜山本＞

そういうふうにじゃわめきながら、呑龍さんは実は高校卒業してすぐに大型ねぷたを描くんですよ。それが次です。１８歳ですよね？上手ですね、としか僕は言えないんですけれども。いやたいしたもんですね。今とは違うんですか？今見てどうですか？１８歳。

＜三浦＞

基本的にはずっと引き継いでるものもあるんですけれども、やっぱり稚拙だというか、とにかくこのねぷたが大型ねぷたの最初でしたので、描けるというううれしさというか、楽しんで描けたというか、要はあまり周りで期待していないわけでしょ、最初の作品ですから。

＜竹浪＞

これまだ呑龍さんという名前の前ですか。

＜三浦＞

前です。ですから、周りで思っている以上のものが描けるんじゃないかとか、そういう気持ちで描いておりました。

＜山本＞

なるほど、わかりました。一方の青森ねぶたの伝統ということを次に伺っていきたいんですけれども。

＜竹浪＞

はい。

＜山本＞

冒頭に、青森空襲からの、戦災からの復興と、もう１つは大型化、観光化のきっかけとなった万博というような話をして、その流れでもって今に至るというようなお話をしましたけれども、とは言っても冒頭で見た今純三の絵もそうですが、脈々と伝統はあるわけですよね、青森も。

＜竹浪＞

ありますね、はい。

＜山本＞

それはどんなふうにねぷた絵師として考えていますか。

＜竹浪＞

製作者として作るって時には、特別伝統ということは私は意識しないんですけれども、良いものを発表

したいという思いで作るわけですけれども。ただ、やっぱり戦争で焼け野原になってしまってなんにもないのに、まずねぷたださねばまいという…

＜山本＞

小屋作る前にその木をねぷたさ使ってしまう、という…

＜竹浪＞

はい。そういうねぷたに対する思いっていう、これ脈々と青森の人たちはあるわけですね。これは弘前も青森も変わらないだろうと思うんですけれども、まず直接伝統というものを意識して作るわけではないですが、我々が今作っているねぶたがずっと続いていかないことには、この祭りも成立しないでしょうし、このねぶたを無くしたくないという思いで行けば、いいねぶたを作ってたくさんの皆さんに喜んでもらって、理解者を増やして、そしてこれからの若い人たちをどんどん育てていかなければならないな、という風な想いがありますし、それから作り手、製作者というだけでなくて、一市民としてねぶた祭という文化にしっかりと参加して、その祭りという伝統をきちっと守っていかなければならないというふうには思います。

＜山本＞

１９番出してもらえますか。これは去年ですね。『天孫降臨猿田彦』ということなんですよ。三浦さんすいません、私はちょっと勉強不足なんですけれども、「天孫降臨」とかそういうのって、弘前の鏡のタイトルになることありますか？

＜三浦＞

あんまりないですよね。

＜山本＞

ないですよね。

＜三浦＞

いわゆる、三国志でいうと関羽とか趙雲とか有名どころ。水滸伝になると、いっぱい人が数多く出てきますので、割とメジャーなところは狙ってやっております。

＜山本＞

そのこと、頭の隅っこに入れていただいて次の写真。これは戻り橋ですから、おそらく弘前ねぷたにも出てくるテーマです。一生懸命私は青森のねぶたの伝統を調べようと思ってこれまでやってきたねぶたの映像とタイトルをずっと調べてみたんですけれども。自由ですね。変な言い方をすると。

＜竹浪＞

そうですね。

＜山本＞

これが伝統ですね。たぶんね。今思っている自由というか広さというのを。

＜竹浪＞

要するに青森のねぶたっていうのは誰が決めたっていう訳でもないんですけれども、とにかく中に灯が灯った紙でできた造形物であって、それで色を施して発表するということですから、こういう題材はいけませんよとかそんなことはないわけでありまして。ですから例えば、十字軍の遠征とかそういうものでもいいですし、実際にこれは中国、それから、弘前でもそうでしょうけれども、インドのお釈迦様の伝説とかそういうのもありますけれども、どこからとってきてもいいんです。ただ青森の伝統というのは、カラクリ人形みたいにねぷた自体が動いたりとか、電球がちらちら散ったりというのはどうしても敬遠されがちですよね。ですから、どっしりとして、それ自体は動かないんですけれども、次の動作を想像させるというか。

＜山本＞

そこは同じですね。一瞬を捉えるというか。

＜三浦＞

動かないんだけれど、動きを感じさせる構図というか、その辺を試行錯誤して何回も何回も繰り返しやっているところなんですけどね。

＜山本＞

空海とかですね、蒙古襲来とかですね、神武東征とか、海王冥王、ちょうど冥王星海王星の順番が変わった年があったと思いますが、その年は海王冥王というのが、御師匠の千葉先生がお作りになって。つまり弘前ねぷたでは考えられないタイトルとテーマが、どんどんどこ自由に出てくるというのは、これは伝統といえば伝統かもしれないというふうに私は思いました。この戻り橋は、もちろん弘前でもよくあるんですが。さて、思えば青森の自由さに対する弘前のって振り返って考えたときに、私はすごくなにか、三浦さん、歌舞伎とか浮世絵とかいわゆる日本画の江戸庶民の楽しみ方みたいなものがすごく津軽藩だっただけに染み込んでいるところがあるのかな、というふうな気がしたんですよ。青森の題材の自由さに比べたら。どう思われます？

＜三浦＞

三国志、水滸伝といっても実際は題名的には半分ぐらいですか、今年あたり８０何台出てますけれども、三国志・水滸伝が半分で、あとは日本のものとかいろいろパターンはあるので、それにこだわってというのではなくて。でも私としては水滸伝・三国志にはこだわりたいんですよ。出てくる人たちのキャラクターっていうのは、すさまじいものがあるし、それは弘前のねぷたにふさわしい、合っている所も確かにあると思いますよ。

＜山本＞

次はすごく難しいコーナーにいきしょう。そういう中で作家として新しさというのは一体何か、という、すごく難しいと思います、これは。言ってみれば、特に弘前ねぷたという場合は、水滸伝、三国志は半分くらいであとは他で、というところである種イメージが出来上がっていて、青森ねぶたでいえば動かなくて、光のいたずらもなくどっしりと構えていて形の伝統ってあって、どこにどういうものを新しく

継ぎ足していくのか、すごく難しいような気がするんですけれども、何なんでしょうね、三浦さん。新しさ、自分なりの個性、新しさというもは。

＜三浦＞

新しい感覚っていうんですかね、なかなかそういうのは、素直にぱっと出てくる場合もあるし。下絵の段階で８０％、９０％決まるので、前のイメージ、前作のイメージとか去年までのイメージとかあるので、それはずっとみなさんの中に残って。

＜山本＞

それは逆に言うと、皆さんがそのイメージを求めているということが前提にあるんであって、逆に言うと自分らしいかどうかというとまた違うことでしょうね。

＜三浦＞

そうですね。逆に、ねぷたっていうのはあくまで客観的だと思うんですよ、祭りという形態をとる中に入っていくものですからね。決して主観、自己満足の世界ではなくて。奇をてらってもだめだし、ある程度その伝統というんですか、その中で新しい感覚を入れていくというのは具体的に言えないんですけれども、すごく難しいところではあります。

＜山本＞

次の写真見せてもらってもいいですか。これは下新町ですね。その新しさというのがどこかから探してみようと思うんですけれども、九紋竜ですね。９つの竜を入れ墨しているんですよね。それが大活躍するという場面ですが。じゃあ次の写真。すごい細かいというのがわかるでしょ。これは入れ墨を中心にしてやるんですけれども、手が抜けないっていうと語弊があるんですけれども、すごい細かいところまできちっと描いているんですね。

＜三浦＞

これ写真なんで、私なんか目が悪いんでちょっとはっきり見えないんですけれども、要は入れ墨をどう表現するかっていうのは何回も描き方を変えて先に色塗ってから、肌の色を塗ってから、墨書きしてっていう描き方をしたり、それから蠟の点で区切ってから描くやり方とか、いろんなことを試すっていうか、それこそ灯が入ってねぷたになるものなんで、実際ねぷたになって灯が入って、出てこないと効果がわからない。ある程度頭の中で予想してやるんですけれども。前にやったところを反省しながらとか、今回変えようとかいろんなことを。

＜山本＞

正直言って、目の前を通り過ぎていくところに、ここまで細かくきちっと見るだけの余裕がなくてですね、写真を見て改めてびっくりしたんですよ。

＜三浦＞

本当に今は特に台数も多いし、合同運行っていう中でねぷたが目の前を通り過ぎていきますので、昔は気に入ったねぷたがあったら付いてじっくり見に行ったり、小屋に見に行ったり、そういうのはじっく

り見る機会があったでしょうから。今はぱっと見ですからね。なかなかその辺、難しいところではあります。

＜山本＞

次の写真を見せてください。これは土手町の去年のものですが、おやって私、正直言って思いました。すごく直線が。

＜三浦＞

どうしても日本武者、三国志の中国武者のイメージからすると、曲線的なのと鎧の直線的なのとの違いっていうか。

＜竹浪＞

これ為朝ですよね。

＜三浦＞

為朝です。保元の乱という。

＜山本＞

では次、見送り。ちょっとびっくりしましたね、これは。『雪之丞変化』

＜三浦＞

昔よく東映とかで。ねぷたの題材としてあれなんでしょうけれども、映画観に行ってそのイメージがあったんで。

＜山本＞

そういう結びつきですか。

＜三浦＞

結構、前の鏡絵と見送りの繋がりっていうのは関連性があった方が、より良いとは思うんですけれども、後ろこれ描きたいと言ったら、そで絵と見送りの脇の部分ですね、それと見送りとの繋がりを最低限関連付けて。芝居小屋の火事みたいな感じで。

＜山本＞

康楽館ですからね。

＜三浦＞

いろいろ、そういうようなこと考えてますよ。

＜山本＞

竹浪さんは、弘前のねぷたが良いって時に、その作家の個性ってそでに出るんじゃないかっていうようなことをお話になっておられたと思いますが、これをご覧になってどういう…。

＜竹浪＞

すごいですよね。鏡絵っていうのは、伝統をお描きになったものを自分なりに味付けしてということが、繰り返し出てくるようなところもありますし、また全くオリジナルものをお描きになる場合もあると思

いますけれども、そで絵っていうのは、絵師といいますか、作家さんの個性というか、まともに出るっていいますか、いわゆるねぷた絵じゃない部分ですよね。

＜三浦＞

主観的な部分も若干入っている。

＜山本＞

ちょっと教えてもらえますか。鏡っていうのは、ある程度伝統というか、そでっていうのはそこのところが少し許される。

＜三浦＞

許される部分ですね。題材がわりと限られているようで広いんですよね。いろんなものがそで絵として可能性があるっていうことなんですよ。昔は龍とか虎とか狼とか、弘前のねぷたのイメージもあったし、ただ、今ですと結構自由にと言うか。

＜山本＞

私は正直ビックリしました。これ見たときに、うわぁって。

＜竹浪＞

ですから、私は今日本当に緊張しているんですけれども、小さい頃から呑龍さんの大ファンで、ずっとねぷた絵を拝見してきたんですけれども、そで絵にいろんな日本画とかいろんな人の絵をモチーフにして、三浦呑龍風の味付けでという。たとえば河鍋暁斎があったり、川端龍子の河童の絵があったり、それから狩野芳崖があったり、円山応挙があったり、たまには全く正面の極彩色とは反対に全く水墨で、墨一色でとか。それから、この額の送りから幽霊かなにかが飛び出したのありましたよね。

＜三浦＞

あれは、前の年に大きいねぷたが流行ったというときがあったんで、いかに目立たせるかっていうのも自分のテーマとして考えたりしたということもあったんですよ。

＜竹浪＞

そで絵を見るのが非常に楽しみで、ずっと見ていました。

＜山本＞

やっぱりわかっている人から見るとそでに個性が出るというのはそういうことなんですね。よくわかりました。では、今度は青森ねぶたの新しさ、というところを見ていきたい、お聞きしていきたいと思いますが。この次です。これが平成１７年にねぶた大賞、それから製作者の最優秀賞、製作者賞を受賞した『小川原湖伝説』なんですよ。これをお見せするのには２つの意味があって、もちろん新しさっていう視点と、そのために何をするかっていうことが１枚の絵に込められているので、竹浪さんに教えていただこうと思います。

＜竹浪＞

このねぶたは、実は今、東北町ですね、合併する前の上北町、小川原湖の伝説をモチーフにしているん

ですけれども。この正面に出ています「青森菱友会」っていう三菱グループの団体なんですけれども、ここのねぶたでずっと私２０年以上お世話になっているんですが、平成６年から、郷土の題材、伝説や民話、あるいは歴史、ゆかりの人物、こういうのをねぶたで取り上げて、遠大の方、あるいは青森県の方にも、ここにはこういう風なお話がありましたよ、ここにはこういう歴史がありましたよ、ここにはこういう伝説が残ってますよということをやりたくて、ずっと以来この団体は三国志、水滸伝、それから日本の武将っていうものは一切なしに青森の伝説の発見というか、青森再発見というテーマでやってまして。一昨年は弘前にも大変お世話になりまして、「為信の卍錫杖の由来」という、築城４００年を先取りして、市役所の皆さんに資料等々大変お世話になったんですけれども。

＜山本＞

次の１枚。「阿部比羅夫、津軽深浦に立つ」っていうことで、これはもう２作見てわかるように、弘前のねぷたではできないような、この題材の幅の広さ、地元の歴史を掘り下げていって、それを表に出していくという、この活動ですよね。これは深浦の人たちも呼んでやったというのを聞いて、僕はビックリしたんですけれども。

＜竹浪＞

これは、深浦町史、深浦町の町の歴史、分厚い歴史。どこにもありますけれども、市史だとか県史だとか。深浦町史が１番最初に日本書紀から引用してきて、深浦町の東の浜というところに阿倍比羅夫がやってきたと。その時に武力で制圧するんではなしに、話し合いでもってその蝦夷と津軽蝦夷が仲良くなってそこで大饗宴をしたという話があって、その話なんですよね。これを知らべるのにまず町の教育委員会とか、そういうところに行って資料をお世話になって。そういううちにこういうねぶたがありますよっていうと、その町の人たちが大変熱くなりますので、じゃあぜひお祭にいらっしゃいということで。このときも町長さんはじめ来てくださいまして。

＜山本＞

深浦のＰＲもその場ですできますよね。はぁ～すごいですね。これは今後ともずっとやっていきたいということなんですか？

＜竹浪＞

そのつもりでおりますけれども、なかなか題材になるようなお話が。例えばすごいいい話でも、女性が主人公であったりとか、唐糸御前の伝説なんかはちょっと、ねぶたにはなりにくいようなんですよね。最後悲しいお話だったとか、やっぱりある程度勇ましくて、元気が出るような題材の方が。

＜山本＞

呑龍さんがさっきおっしゃったことでいえば、例えばその節堂さんの絵を間近で見てドキドキして、それから達温さんの絵を追いかけるように見ていくというのを考えれば、つまりこういう「阿倍比羅夫、深浦」とか、子どもたちが見ると、そういう意味で強烈にインプットされるということでしょう。

＜竹浪＞

ですから私も歴史の教科書で習う前にねぶたからなんですよ。加藤清正とか、それから風雲児信長。織田信長って知らないで風雲児信長って、タイトルになっているから知っているんですよね。それぐらい津軽の子どもたちはねぶたのインパクトは大きなものがあると思うんですよ。そういうときに、地元にこういう伝説がありました、こういう歴史がありました、ということは社会科の教科書で学ぶ以前に、こういうものを吸収できればいいのかなという想いもありまして。

＜山本＞

なるほど、すごいですねぇ。その新しさという意味でもうちょっとだけ呑龍さんにお話をお伺いしたいんですけれども、新しさと同時にねぷたの悲しさって言うのも、苦労の１つで一期一会っておっしゃいますね。

＜三浦＞

ねぷたは７日、８月１日から弘前は７日までなんですけど、最後は川に流してやる、そういう禊の行事だっていうお話ありましたけれども、正にそうで、消耗品なんですよね。いまだとそれでも、剥いだねぷた絵を保管している団体さんも結構あるみたいですけれども、基本的には雨も降りますし、完璧な形ではそんなにねぷたは残らないっていうか、その年だけのねぷたっていう。そういう意味では見ている人の記憶に残るだけの絵なんですよね。できるだけ強い印象を持って、このねぷた、役目を終えてもらいたいというのが私たちの気持ちなんですよ。そういう意味で一期一会だっていう。

＜山本＞

そこに１年かけて。

＜三浦＞

今年を引きずらないっていうのも、美しいものだと思うんですけれども、そういう見方すればね。次また新しいねぷたが来る。ただ今年のこれで終わり。でも何年か経ってあのときのあのねぷたって記憶に残る絵であったら自分としては嬉しいことなんです。そのために描いている。

＜山本＞

竹浪さんも全く同じでしょ。

＜竹浪＞

全く同じですね。青森の場合は絵でないわけですから、大きな重機でぐしゃっと潰してしまいますから。

＜山本＞

そんな荒っぽくやるんですか。

＜竹浪＞

はい。解体の日って言うのは、時間が２日くらいしかないものですから、台から引き摺り下ろして、それをぐしゃってやって終わりですから、直接そのぐしゃってやる現場には立ち会ったことはないですけれども、

＜山本＞

立ち会えないですよね、悲しくて。

＜竹浪＞

基本、それですから、来年はまた新しいねぶたに出会える。まさに今、呑龍さんがおっしゃったように一期一会の、そういう気持ちですね。

＜山本＞

なるほど。わかりました。時間も押し迫ってきましたが、最後にお聞きしたいと思います。いろんなお話で作者、あるいは絵師っていうしんどさとかもある程度は想像できるんですが、さぁいよいよ祭だと向かっていくときに、ドキドキしますよね。たぶん自分の作品ですから。どんなときが一番血圧上がるかっていうのをちょっと教えていただけないですかね。

＜三浦＞

先ほども前半にちょっと触れたんですけれども、私の場合は絵を描くっていうというので、照明とか別個の問題で、また運行のときにどういう風な姿で出てくるかっていうのは想定できないというか、それでまたねぷたがよく見えたりするわけでしょうから。土手町に毎年、ねぷた始まりますと、毎日見に行きますよ。土手町も、駅前コースも。ねぷたがどういう感じで出てくるのかなというのが、できてしまったから安心だという、決してそういう楽しみだということで見に行くわけではなくて、ドキドキはらはらで、雨も降ってきますよね。今年、去年、一昨年、３年くらいねぷたが始まると雨が降ってくる。どこか自分のねぷたが来るときにいい環境で来ますようにとか、そのように思ったらいけないんでしょうけど、そういうこと気になりますよ。

＜山本＞

例えば、ねぷた小屋を作って、６月下旬くらいから、中で我々は昔の骨組みの掃除をしたり、お囃子の稽古とかもしていくんですけれども、紙貼りっていう時までわからない、どんな絵か。幹部の人たちは知っているのかわからんのですが、それは待つ側が今年どんな絵が来るんだろうということもあるんだろうけれども、出す側としても本当にこれで、みたいなところは。そこのひと夜がすごいですよね。

＜三浦＞

明日取りに来るとかって電話かかってくると、もう１回ねぷた広げて最終チェックみたいにしているんだけれども、あれ、これでよかったのかなとかって思うときがあるんですよね。これ灯入ったらどうなるんだろうかと思ったりして、ちょっとねぷた持ち上げてみたりして、違うんじゃないかとかって気になって描き直そうかって。実際、描き直したこともありましたしね。そういうジレンマというか、かなりこう･･･

＜山本＞

弘前ねぷたに関してで言えば、描く側も小屋で待つ側もその一瞬で、すごいドキドキそれを待っているわけ。

＜三浦＞

それは貼ってしまえばもう１回というわけにはなかなかいかないでしょうから、その前までがすごく、そういうジレンマというか。

＜山本＞

夜も眠れない日があるのかなとか想像しましたが、竹浪さんはその血圧がピークになるときはいつ頃なんですか。

＜竹浪＞

３回くらいあるんですけれども。

＜山本＞

３回もあるんですか。

＜竹浪＞

７月後半、まず私たちの場合は、台上げって決まっていまして、つまり台に乗っける日、大安吉日を選んだりとか団体さんの都合もありますし、１人２人で上げれるもんじゃないですので、５、６０人集めないといけないですからその人たちの手配とか、その人たちのお弁当とか全部手配していますので、なにがなんでも７月２７日といったらその２７日の朝にはできていないとだめなわけですよね。

＜山本＞

それは要するに手配する側の、プロデューサーとしての血圧。

＜竹浪＞

その日に間に合わせるということが大切なわけですよね。ちょっと１日延ばしてくれないか、ということは無理ですので。その台上げの日っていうのはだいたい５月末か６月には決まっているわけですよ。ですから納期が決まってますから、それに間に合うかどうかという、まず肉体的なプレッシャーで、７月の後半、なかなか大変なときがあるし、あと精神的にはやっぱり１番は、台上げの日が１番ハラハラドキドキですよね。下において作っていますから、明かり入れたりとかはチェックできるんですけれども、あれが２ｍ近くの台の上に上がって下から見たときに、果たして目線がちゃんと･･･

＜山本＞

それは部分部分で作って、想像できているようだけど、紙貼りと同じような緊張感はものすごくある。

＜竹浪＞

絵を貼るのと同じようなのはありますね。

＜山本＞

あぁ、絵貼りとね。

＜竹浪＞

しかも小屋の中というのは大きいように見えて、２、３ｍしか離れていませんので、台の上に乗せて５ｍ、１０ｍ離れてみたときに、果たして右と左の武者の目線がピタッと合っているかとか、それは想像するんですけれども。

＜山本＞

それは後でちょっと直してとか、できないこと。

＜竹浪＞

できないですね。

＜山本＞

それは血圧上がりますね。

＜竹浪＞

その日なんかはいくら疲れていても、何か気になって朝早く目が覚めてしまいますしね。

＜山本＞

なるほどねぇ。

＜竹浪＞

まず天気が気になりますし、小屋から出してやりますので。今日は雨大丈夫かなとかですね。

＜山本＞

ご苦労が多いことでございますが。もう、これでそろそろ時間ですので終わりにしたいと思います。どうぞこれ消してください。いずれにしても、もうお二人とも製作には、今年の夏に向けてもうお忙しい時期ですよね。

＜三浦＞

もう、頭の中を整理して、今年の描くものは。

＜山本＞

大体構想はできあがっているんでしょうか。

＜三浦＞

はい。

＜山本＞

もう、部品、部分というのは作り始めておられるんですか。

＜竹浪＞

例年よりちょっと遅れ気味なんですけれども、構想はまとまっていて、今１部、手とか足とかそういうところには入っています。

＜山本＞

そうですか。これからまた、我々はまだねぶた祭、ねぷたまつりというのは感覚的には夏だと思っているんですけれども、今もう、明日から夏みたいな立場におられますが、これからもより一層良いねぷたとねぶたを作っていただけますように、よろしくお願いいたします。最後に実際にそれぞれのねぷたを運行している状態は見たことがあるんですか、ありますよね。

＜三浦＞

はい。毎年、毎日。青森はまだ。５、６年前に海上運航のイベントのときには見させていただいたんですよね。

＜山本＞

これを機会にそれぞれの交流も深めていただければありがたいなと思います。また今年の夏も期待しておりますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

＜三浦＞＜竹浪＞

どうもありがとうございました。

＜山本＞

ありがとうございました。